

人権同和教育啓発資料

人権つうしん

第27号

発行 長野県教育委員会人権・同和教育課
発行人 小幡 誠 宣

長野市大字南長野字幅下 692-2
電話 026-235-7452
FAX 026-235-7490

私はT町役場の住民生活課の生活係で仕事をしている者です。

ある朝、私の担当である曙町のゴミステーションの様子をパトロールしていたときのことです。それぞれのステーションでは、腕章をした当番の方が、ゴミを出しに来る人たちに、にこやかにあいさつをされています。朝の爽やかな空気に「おはようございます。」の澄んだ声が響き、思わず私にもっこりしてしまふ朝の風景でした。

しばらく自転車でまわっていきますとあるゴミステーションで、ちょうど当番だったのか、知り合いのSさんとKさんが、困った様子で話をされているのが目に入りました。そこには、町の指定ではないゴミ袋に入ったゴミが二つ、置かれています。

「私たちが朝来る前に、もう置いてあったんです。」
「どうしましょう。家のゴミ袋に入れ替えて置いておきましょうか。」
そんなやりとりの中で、ちょ

あそこのアパートの人は、そんなことをする人たちじゃありません！



うどゴミを出してきたYさんがつぶやくように言いました。

「〇〇アパートに住んでいる外国人が出したんじゃないかねえ。」
それを聞きながら、私も、「そうかもしれないですね。今、外国人のゴミの出し方について、どこでも困っているんですよ。」

「Kさんの言つとおりです。ゴミの出し方については、私たちは区長といっしょに、家まで行って伝えてあります。日本語がはつきり分らない人もいますので、わかる人に通訳してもらって話し合っております。絶対にあそこのアパートに住んでいる方々のせいじゃありません。」

と相づちを打ちました。するとKさんが、
「絶対にそんなことはありません。あそこのアパートの方は、今までもしつかりと決められたときにゴミを出しています。そんなことをする人たちがいないですよ。」

次にSさんが、ちょっと怒った口調で、

「いつも気持ちよくあいさつをして、私たちと親しくしていただきます。そんなことをする人たちじゃありませんよ。」と、笑いながら話してくれました。

二人の抗議にも似た主張に、私は頭を打たれた気がしました。「ゴミの出し方が悪いのは外国人」と、いつも頭の中に描いていたような気がして、恥ずかしい思いでいっぱいになりました。

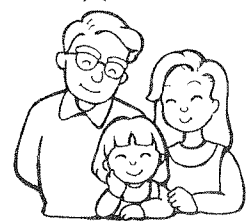
同時に、私の町にも、曙町のように外国の方々といっしょに自治会づくりをすすめているところがあることを、たいへん誇りに思いました。

大事にしたいいのちのバトン

更埴市立植生中学校 一年 国光 日子

「自分の番 いのちのバトン」を勉強した。

私がここに生きていられるのは、大勢の人のおかげ
お母さんとお父さんと二人、
おじいちゃんとおばあちゃん四人
そのまた両親で八人：
そつ数えていくと、十代で千二十四人
この中で一人でもいなくなったら、
バトンを渡すことができません。
今の私はここにいない。



お母さんのお母さん、そして、そのまたお母さんは、どんな気持ちでその時代を生きて、バトンを渡していったのだろう。

私の先祖は誰なのかなあ、と時々考える。もしかしたら、クラスの中の誰かと兄弟かもしれない。

いのちのバトンはリレーのように、次から次へとバトンがまわる。少し前まで、私は、今ここに生きているのを「あたりまえ」と思っていた。

でも、今こうして生きていられるのは、「奇跡」といってもいいのかなあ。

私は、たまたまお父さんとお母さんの間に生まれた。たった一人、たった一人のいのちが、いじめや差別を受けて失われたりすると、五十万人、百万人、いや、たくさんの人によって受けついできたバトンを、失ってしまうことになる。

いのちのバトンは、渡しつづけた人のために、そして、未来の人々のために、大事にしていきたい。

平成十三年度 更埴市教育委員会 編
「かいほう(人権作品集・第二十一集)」より



先日、ある会社の社長さんと話す機会がありました。お子さんはすでに親元を離れて、今はご夫妻で過ごしていらっしゃるそうです。話の中でちょっと楽しいことがありました。

その社長さんのところは、食後のコーヒーをだれがくれるかを、ジャンケンで決めるそうです。そして、勝った方がコーヒーをいれることになっており、ジャンケンに強い社長さんが、いつも当番になってしまっているそうです。

ところで、ジャンケンは勝ち負けを決めるときに使われますが、多くは勝った人がいい目にあい、負けた人は損をすることが多いわけです。

幼い頃、勝とうとして、わずかに後だしをしたことを思い出しま

した。

ある研修会で「後だしジャンケンをして、必ず相手に負けてみよう」と言われ、みんなで一緒に挑戦してみました。たかがジャンケン、しかし、これが意外にむずかしいのです。

それはきつと「勝つことが有利」……このことが、遊びをおして無意識のうちにしっかりと刷り込まれてきているからかもしれない。しばらく繰り返し、ようやく「負ける」ということを身体が覚えてくれました。

これと同じようなことが、私たちの身の回りにも結構あるように思います。

生まれたときから、誰もがみんな当たり前に行っていること、それがそのまま、何の疑問もなく私たちの生活の中に位置づき、受け入れてしまっていることを「刷り込み」ということにして考えてみたいと思います。

PTAとして、授業参観に出席するのは母親、でも、学級会長は父親(最近では変わってきました)、まして、PTA会長は男性でなければ……。

副会長をやっていた女性がPT

A会長に推薦されたが、最終的には反対されたという話も時折聞きます。

「人としては会長の適任者だが、女性が上に立っては、下につく男衆がきつとやりにくいだろう」という理由だったということもお聞きします。

「長」は男性と決まっている……。これも「刷り込み」のひとつではないでしょうか。

知らず知らずのうちに染み付いた「刷り込み」を、いったん立ち止まって「なぜだろう?」と考えてみることも、また「社会の決めつけ」を「なぜだろう?」と見直してみることが必要かも知れません。

「人権尊重のまちづくり」というと難しく考えてしまいましたが、この話のように日々の生活を振り返ってみることが大切だと思います。そして、今まで「刷り込み」を受け入れてきたことはないか、みんな話し合うことが必要だと思つのです。

きつと毎日の生活も気持ちのいいものになるはずですよ。



法事の席で夫の義姉に気を遣いつつ……

うちのキッチンに慣れてないお義姉さんより、慣れてる夫のほうが役に立つのに、法事になるとどうして嫁総動員になるんでしょう。不合理だわ。



困った困った。「きもの着てすわっているお人形はほしくない、怪獣がほしい」という娘の気持ちよくわかるわ。私も着せ替え人形よりウルトラマンがほしかったもの。でもねえ……。夫がうんと言わないのよね。好きにさせてと、女の子らしくないのはおまえの責任だと言われるし……。



…みなさんどう思いますか

娘に怪獣のおもちゃをせがまれて……

「まち」の中で 生きる

アンサンブルのびびるなやんこ

松川町の国道沿いに避暑地のペンションを思わせるような洋風の建物が目をひきます。



「ワーキングスタジオアンサンブル」知的障害者のみなさんの通所授産施設です。「アンサンブル会」代表の小椋年男さんにお話しをお聞きしました。

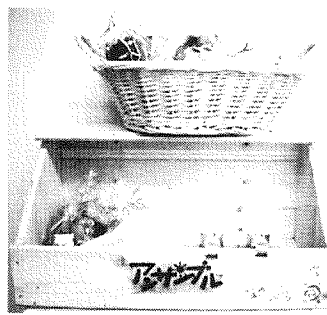
「アンサンブル会は、一養護学校に通っている子

もの親が中心になって発足しました。

卒業後、私の娘は、郊外の通所施設よりも、自分の生まれたこの町の中で生活したかったようです。自分で買い物したり、街の中を歩いたり、同じ年頃の子がやっていることを、娘もやりたかったのだと思います。その気持ちを感した時、私は一大決心をしました。障害のある子も地域で生きていくことができる社会を築きたい、そのための拠点をつくりたい、障害があっても、みんなと同じように、自分のやりたいことができるとような環境をつくりたいと考えました。こうした同じ願いをもった保護者のみなさんが集まってアンサンブル会がつくられました。そして、発足一年半後に、

松川町から共同作業所として認可され、その後、より広がりのある活動と社会参加をめざす中、今年十月に法人の認可があり、今年四月、通所授産施設の新規開設にこぎつきました。」

「ワーキングスタジオの二階から楽しそうな声が聞こえてきます。吹き抜けの階段を上っていくと昼食の用意が始まっています。アンサンブルオリジナルのクッキーの甘い匂いに包まれて、エプロン姿のみなさんが笑



顔で迎えてくれました。」「知的障害者の仕事というと特定の単純作業が用意され、個人の希望とか選択の幅が限られてしまう傾向があります。アンサンブルでは、その人の可能性を一一から探してみたいと考えています。メインの仕事は、畑での野菜作りです。作っ

た野菜は『下伊那のやさしい船』の名前で出荷しています。それで、このクッキーは一町の道の駅でも売っていますよ。」

今年、一養護学校を卒業してアンサンブルに入ったNさんがニコニコして私の側に来たので、「ここは楽しいですか。」と聞くと、うれしそうに「うん、楽しい！」と応えてくれました。

「障害があることを感じさせないような社会、松川町にはそんな雰囲気がありますよ。実はうちの娘に行きつけの喫茶店ができてねえ。そのマスターは、娘が行くのを心待ちにしているんですよ。」

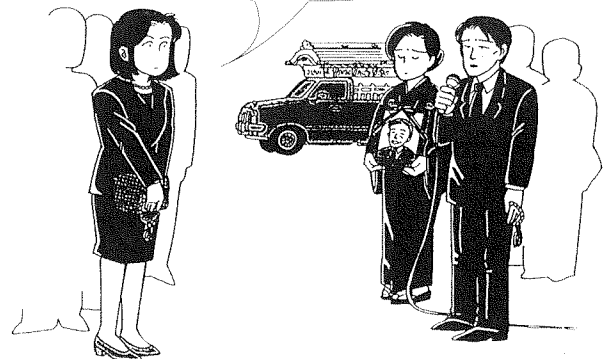
喫茶店のマスターYさんにお話しをお伺いすることができました。

「いろんな人が集まれる場にしたかったんですよ。お年寄り、障害のある方、日々介護をしている方、みんなのくつろぎの場になればと思っています。そこで知り合ったのが小椋さんの娘さんMさんなんです。ここで、Mさんいろいろな人と自然に出会い、明るく伸び伸びと楽しんでいますよ。」

そして、アンサンブルに集まる地域の方は、

ジェンダーって何!?

お父さんと一緒に暮らしていたのは彼女、最期をみとったのも彼女なのに、長男というだけで、どうして東京にいる弟さんが喪主になるのかしら…。



友人のお父さんのお葬式に参列して

「ポランティアという言葉があります、周りの人たちから見れば私たちもボランティアかもいれませんが、でも、ここが楽しくて、この仲間が楽しくて自然に足が向くんですね。私たちのほうが、仲間の皆さんから元気をもらっているんですよ。」



小椋さんが目指すノーマライゼーションの社会が、着実に地域に広がっていることを感じました。

自然豊かな閑静な住宅地S町、最近特に新築の家が建ち並びます。

宮島茂さん(四〇歳仮名)は、家を新築して家族と共にS町に移り住んで六年になります。もともとは大阪に住んでいたのですが、家族四人で兄の住む自然が豊

わたしがS町に住むようになったわけ

～わたしたちの決断～



かなふるさに引っ越して来たのです。ここに来ようと決めた六年前に宮島さんは、ある決断をしました。

(ここからは宮島さんの話です。)

私は、六年前、大阪を出て、田舎で暮らそうと思いい、S町に住む兄のところへ電話をしました。

「兄さん、実は、今の会社も、数年後にはどうなるかわからないんだ。大阪から、そっちへ移りたいと思うんだけど、前、家を建てるのいい土地があるって聞いたから…」

「それはいいな。でも、このまへの土地の話なんだけど、あれはやめた方がいいな。おまえに話しちゃってから、こんなことを言うのもなんだけど、そこじゃなくてもいいところもあるぞ。」

「何でだい？日当たりもいいし、百坪くらいあって、坪単価も安くっていいって言うてたじゃないか。」

「久しぶりに、こっちへ来ないか。このことについて、ゆっくり話そうか。」というわけで、私は久しぶりにS町に行くことになりました。三年ぶりのふるさとは、たくさんの家が建ち並んで、すっかり様変わりしてしまつたのに驚かされました。

兄といっしょに、A地区のその土地を見に行きました。確かに一日中大陽が当

たるくらい日当たりがよく、都会では考えられない環境。そして土地の安さに、私は妻に相談して、ぜひ購入したいと思いました。

ところが、兄によると、ここが同和地区で、何人かの人が、この土地を気に入って買おうとしても、最後は誰も購入せず、同和地区にあるというだけで、みんな敬遠してしまうということでした。

そして、兄は

「同和問題はだいたい解決してきてはいるが、地元ではまだまだ住みにくいかもいれないぞ。」と伏し目がちに遠くを見て言いました。

こんなに環境が良くて絶対好の場所はないのに、ここが同和地区だということ、賛成してくれない兄の気持ちに私はわかりません。

私はこの土地がますます気に入ってしまい、何が何でも購入しようと思うようになり、妻も私の話を聞いてすっかりその気になりました。

「私はそこが気に入ってるんです。あきらめたくないわ。私たちは、そこへ行きましょう。子どもたちもまだ小さいから今がチャン

スだと思わわ。」という妻の言葉で、家族みんなでS町に引っ越すことになりました。

新しい土地に家を新築したので、喜びの反面、不安もありました。

しかし、隣組にも入り、おつき合いが始まってからは、そんな不安は吹き飛んでしまいました。畑でとれた野菜をいただいたり、子

どもも同年代のいつも一緒に遊ぶ友だちができたり、何よりも美味しい空気と、絶好の環境がとてもうれしかったです。この前は、地区対抗の野球大会があり、S町A地区チームで私もメンバーになり、大会に出場しました。これがまた楽しく、すっかりA地区のみなさんと親しくなることができました。

六年たち、子どもは中学生になりました。学校で同和問題を学んでいるので、六年前のこの話をしたところ、子どもたちは、こんなうれしいことを言ってくれました。

「お父さんとお母さんが決めたことは、正しかったと思う。私たちもここに来て本当によかったよ。」と……。

心あたたまるビデオを紹介します。

風のひびき

【平成11年度 54分】

企画
法務省人権擁護局
財人権啓発推進センター

聴覚に障害のある主人公が、ホームヘルパーとして働きながら、様々な現実の壁を体験します。そして、悩みながらも、心のバリアフリーを信じて、前向きに生きていきます。違いを認め合いながら、共に生きる大切さを訴えています。

蛍の舞う街で

【平成10年度 42分】

企画
北九州市 北九州市教育委員会
北九州市同和问题啓発推進協議会

二家族の交流を中心に、日常生活の中で常識だと思っていることの中にも人権問題が潜んでいること、また、お互いを尊重するための自立と共生、家族のきずな、地域社会の連帯のすばらしさが伝わってくる心あたたまるアニメーション作品です。

啓発ビデオの貸し出しお申し込みは

- 東信 上小地方事務所 厚生課 0268-25-7122
- 南信 上伊那地方事務所 厚生課 0265-76-6810
- 中信 松本地方事務所 厚生課 0263-40-1911
- 北信 長野県隣保会館 026-228-1306

